

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

区名	住吉区
学校名	大阪市立遠里小野小学校
学校長名	林 真美子

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和7年4月17日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に关心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・遠里小野小学校では、第6学年 38名

令和7年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

令和7年度は、国語科では正答率62%で全国平均より4.8ポイント、大阪市平均より3ポイント下回った。算数科では正答率52%で全国平均・大阪市平均よりも6ポイント下回った。理科では正答率54%で全国平均より3.1ポイント、大阪市平均より1ポイント下回った。本校児童の学力は大阪市や全国と比べてもあまり高くないと言える。しかし、平均無答率をみると、全ての教科において、全国平均・大阪市平均を下回っており、本校児童が課題に対してしっかりとと考え、解答していこうとする粘り強い態度で臨んでいることがうかがえた。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕 全体の平均正答率は全国平均・大阪市平均を下回った。各領域の平均正答率においても、全ての領域で全国平均・大阪市平均を下回った。特に、「話すこと・聞くこと」においては大きく下回っており、課題を残している。この課題の改善を図るとともに、学力の向上をはかるために、「学力向上支援チーム事業」と連携し、今年度の研究に取り組んでいる。

〔算数〕 全体の平均正答率は全国平均・大阪市平均を大きく下回った。各領域の平均正答率においても、全ての領域で全国平均・大阪市平均を下回った。特に、「図形」では平均正答率が50%を切る結果となり、課題を残している。

〔理科〕 全体の平均正答率は全国平均・大阪市平均をやや下回った。各領域の平均正答率においては、「エネルギー」「粒子」を柱とする領域では大阪市平均を上回った。しかし一方、「生命」「地球」を柱とする領域では全国平均・大阪市平均を下回った。今年度は、理科教育推進校に選定され、「理科補助員」を配置し、体験的活動を数多く取り入れる中で、児童自らの気づきを大切にした授業作りに取り組んでいる。

質問調査より

「自分には、よいところがあると思いますか。」では、肯定的な回答が80%以上あり、集団育成の中で、学級が児童一人ひとりの安心できる居場所となるよう取り組んできたことで自尊心の向上につながった。「友達関係に満足していますか。」「人が困っているときは、進んで助けていますか。」「人の役に立つ人間になりたいと思いますか。」ではどちらも肯定的な回答が80%以上あり、学級や縦割り班等での活動を通して、他者と関わり、絆を育むとともに、思いやりや有用感の向上等の心の成長へもつながった。「分からないことやくわしく知りたいことがあったときには、自分で学び方を考え、工夫することができますか。」では、昨年度とは異なり、肯定的な回答が85%以上あり、主体的に工夫して学ぶ姿勢が身につきつつあることがうかがえた。一方で、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方方に気付いたりすることができますか。」では、昨年度同様、肯定的回答が80%以下であり、課題を残している。話し合いに向かう姿勢は国語科の研究を中心に身につきつつあるが、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための話し合い活動には到底達していない現状である。長年、遠里小野小の児童の多くが抱える課題は自信の欠如である。自信の欠如からうかがえる『力はあるが、力を発揮できない。』児童の実態を変化させるためにも、教育活動全般において、児童の確かな自信の確立に向けた実践の構築も急務の課題である。

今後の取組(アクションプラン)

国語科・算数科・理科の全てにおいて、全体の平均正答率が全国平均よりも低かった現状を踏まえると、学力の向上を図る実践が必要である。その取り組みの中心として、国語科を研究し、『主体的・対話的で深い学び』の実践を行い、学びを深める。『主体的・対話的で深い学び』の実践として、研究授業を計画的に行ったり、ICTを活用した効果的な授業実践に取り組んだり、教員の授業力向上や授業改善を図っていく。

児童の確かな自信の確立に向けては、教育活動全般において、児童がやり遂げ、達成感を味わえる機会を増やす。また、児童が主体となって考えることも大切にしていく。そして、主体性をもって考え行動する児童の育成につなげていく。